

纏向遺跡第 193 次調査現地説明会資料

平成 29 年 11 月 11 日

桜井市教育委員会

はじめに

このたび、桜井市教育委員会では旧纏向小学校跡地にて纏向遺跡の整備事業に伴う発掘調査を実施いたしました。調査に際しましては地元関係者の方々より多大なご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

今回の調査地はかつて纏向小学校用地として使用されていました。現在の小学校用地へ移転後に、学校建設による遺構への影響と残存状況の確認を目的として、昭和 54 年から 62 年にかけて 4695 m²の発掘調査が行われました。その結果、削平された前方後方墳のメクリ 1 号墳など複数の墳墓のほか、祭祀土坑や掘立柱建物など多くの遺構が検出されています。その後発掘調査報告書の刊行を経て、平成 25 年にメクリ 1 号墳を含む旧小学校用地の大半は史跡纏向遺跡として史跡指定されています。

桜井市教育委員会では平成 28 年に纏向遺跡の保存活用計画を策定し、纏向遺跡の保存と活用を進めているところです。その一環として史跡指定地の整備と史跡纏向遺跡隣接地に纏向遺跡のガイダンス施設建設を予定しています。そこで、①ガイダンス施設建設予定地の遺構残存状況を確認することと、②昭和 61 年に行われた調査で未検出のメクリ 1 号墳東側周濠の残存状況の確認を目的に発掘調査を行いました。なお、調査期間は平成 29 年 7 月 3 日から継続しており、調査面積は現状で約 690 m²となります。

調査地の位置と環境

調査地は標高 75m 前後の東側から派生する扇状地上の微高地にあたります。この微高地は太田微高地と呼ばれており、微高地の北側には現況で比高差 2m 程度の旧河道が流れていたことが判明しています。周辺は纏向遺跡でも比較的古い段階(庄内式期)の遺構が密集して分布する地域であり、これまでの調査でも庄内式期を中心とした多くの遺構が確認されています。また、今回の調査地周辺では、方形周溝墓のほか、木棺墓や土器棺墓といった多様な形式の墓が検出されています。

検出された遺構

今回の調査では調査区を 2 つ設けています。ここでは調査区ごとに解説します。なお、今回示した各遺構の時期や規模は今後修正される可能性があります。

● 1 区（ガイダンス施設建設予定地）南北約 24 m × 東西約 19 m

まず 1 区（ガイダンス施設建設予定地）では、小学校建設に伴う造成などで旧耕作土は削平されており、黄褐色粘質土で構成される地山面直上で遺構を検出しました。遺構

には方形周溝墓（少なくとも3基）、溝、土坑などがあります。方形周溝墓は削平のため埋葬施設は残っておらず、墓の周りに巡らされた溝のみが認められました。

なお方形周溝墓については、これまでの調査で見つかっているメクリ1号墳周辺の3つの方形周溝墓と重複させないため、方形周溝墓4から連番としています。また、墓の規模については検出面での計測値です。

方形周溝墓4は西半が調査区外に出ます。南北の約5.9m、東西約3.3m以上、溝幅約1.1m前後をはかります。北・東辺の溝は約0.6mと深いが南辺は約0.3mと浅く、北辺上層から多く遺物が出土しています。完形の個体の他、離れて接合した個体もあります。庄内形甕が含まれ、溝の埋没時期は庄内式期（3世紀前半～中頃）と考えられます。

方形周溝墓5は南北約8.5m、東西約9.0m、溝幅約1.3m前後をはかります。全体に浅く、深さ約0.4mをはかります。真北に対して約5°前後西に傾きます。方形周溝墓4の東辺の溝を共有しており、土層の検討から方形周溝墓4が先に築造されています。詳細な築造時期は現在のところ不明ですが、周溝と埋土を共有する土坑の上層からは布留式期（3世紀後半以降）の土器が見つかっており、3世紀後半以降には埋没したものと考えられます。

方形周溝墓6は南北約6.4m、東西約7.3m、溝幅約1.1m前後をはかります。東辺の溝の大半と、北辺の溝の一部が調査区外に出ます。溝の深さは約0.7mをはかります。真北に対して約35°前後西に傾いており、第27次調査で検出した方形周溝墓1と方位が似ています。北辺の溝と西辺の溝がコーナー部分で途切れています。北辺の溝上層からまとめて土器が出土しており、庄内式期でも前半（3世紀前半）に埋没していると考えられます。

方形周溝状遺構1は方形周溝墓6の西に接する「コ」の字状の遺構です。南北約3.0m、東西約3.2m、溝幅約0.5m前後をはかり、真北に対して約30°前後西に傾きます。北辺は後述する溝SD-1002と接します。西辺の溝の埋没はSD-1002より新しくみえますが、東辺の溝はSD-1002との接点で急激に浅くなり、SD-1002の存在を意識して作られていると考えられます。古式土師器が出土していますが現在のところ詳細な時期は不明です。

溝SD-1002は調査区の北側を北東-南西に抜ける溝で、幅約0.9m、長さ約12.4m以上をはかります。出土土器から庄内式期（3世紀前半～中頃）の遺構と考えられます。

築造順序を検討すると、方形周溝墓4→方形周溝墓5は層位から言えます。また、出土土器からみて、方形周溝墓6の埋没は方形周溝墓4よりも古いと言えそうです。よって方形周溝墓6→方形周溝墓4→方形周溝墓5の順に築造された蓋然性が高いと言えます。SD-1002と方形周溝墓状遺構1は庄内式期に共存する時期があったと考えられます。

● 2区・3区（メクリ1号墳東側周濠）南北約23m×東西約10m

これまでの調査でメクリ1号墳の大きさは全長28m、後方部長がクビレ部分で19.2m、前方部長が8.8mをはかることがわかっています。埋葬施設は既に削平されたものと考えられ、古墳の周囲を巡る周濠のみが検出されています。周濠出土の土器から庄内2式期から3式期（3世紀前半～中頃）に築造されたと考えられています。

2・3区は当初2区と3区に分けて調査していましたが、調査の都合上両者を接続しています。地表から深いところで約1.4mを掘り下げ、昭和61年に行われた第47次調査地の遺構検出面を再度精査しました。その結果、メクリ1号墳東側周濠が想定される箇所部分的に堆積する土層（茶褐色シルト質まじり砂礫層）を検出しました。

層厚数センチ程度の茶褐色シルト質まじり砂礫層からは、古式土師器と思われる土器片が出土します。極めて残存状況が悪いため、この層をメクリ1号墳の周濠堆積土と断定するには至りませんが、分布から見てその可能性があるものと考えています。

この層を周濠堆積土と仮定すると、メクリ1号墳の東側周濠は広いところで幅約5.0m、メクリ1号墳の後方部の東西幅は約20.1mを測ることとなります。

これまでの調査でも、メクリ1号墳の周濠は西側で約0.6cm、北側や南側では0.2cm～30cm程度と、東側ほど遺構の残存状況が悪いことが判明しています。そのため、メクリ1号墳の東側周濠は著しく削平されているものと考えられます。

まとめ

1区（ガイダンス施設建設予定地）では複数の方形周溝墓を確認しました。2・3区（メクリ1号墳東側周濠）では確実なメクリ1号墳東側周濠をとらえるには至らなかったものの、周濠堆積土の可能性のある土層を検出しました。

これまでの調査を含めて、メクリ1号墳周辺には少なくとも6基の方形周溝墓が確認できました。メクリ1号墳の築造と相前後する時期に、周辺で小規模な墳墓が築造されていることが今回の調査でより明瞭となりました。このあたり一帯は纏向遺跡の墓域の一つであったといえるでしょう。またこれまでの調査で、方形周溝墓のほか、土器棺墓や木棺墓も検出されています。つまり一つの墓域に様々な形態や規模の墓が採用されていることがわかります。当時纏向遺跡にいた人々の身分や立場といった社会階層を反映している可能性があるといえるでしょう。

今後の課題として、メクリ1号墳や既に見つかっていた墳墓も含めて、どのような順序で築造されたのか明らかにすることが挙げられます。また、メクリ1号墳よりもさらに規模の大きい纏向石塚古墳（全長99m）などの前方後円墳との関係についても今後の検討課題となります。

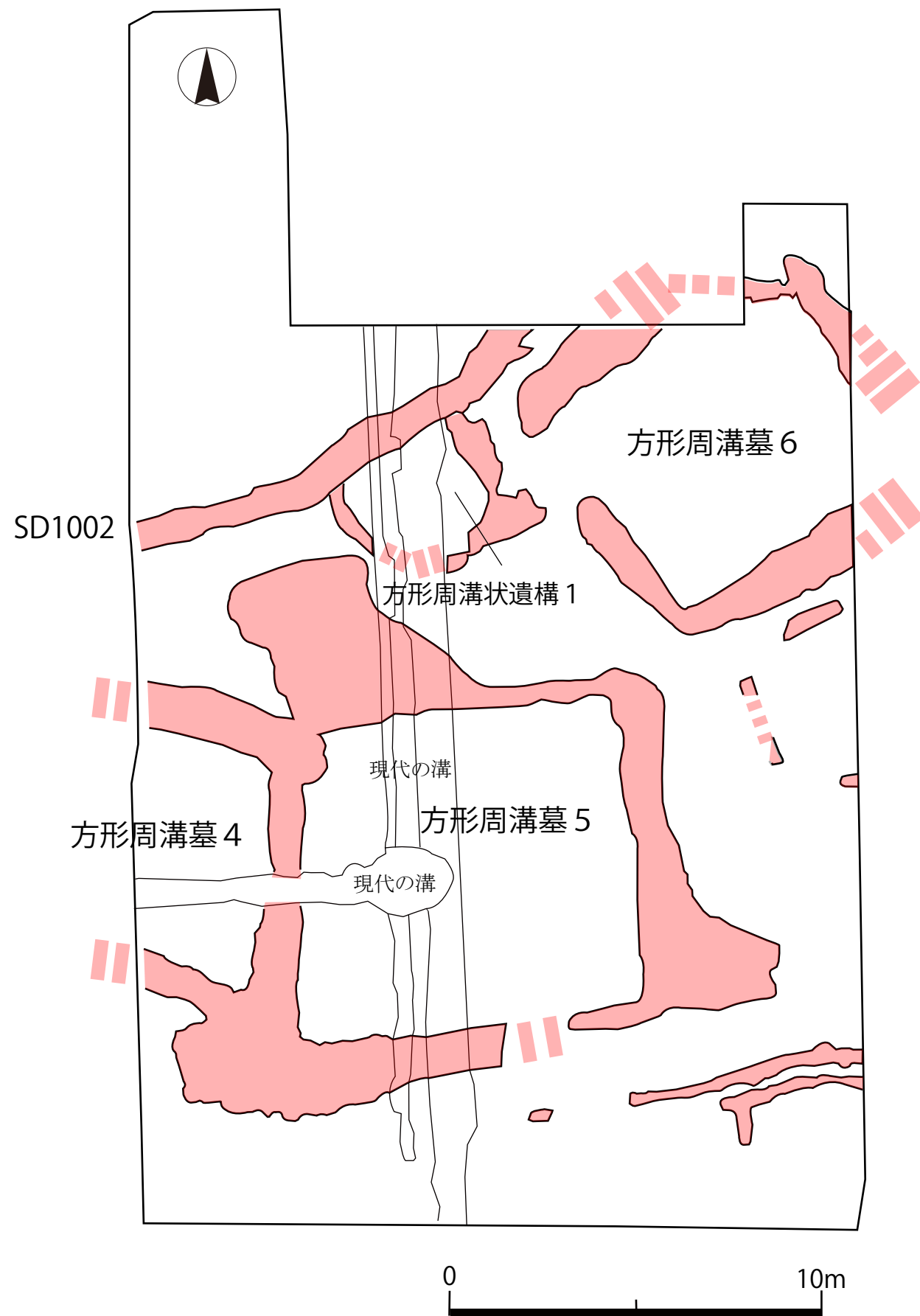


図2 纏向遺跡第193次調査1区平面模式図(1/150)

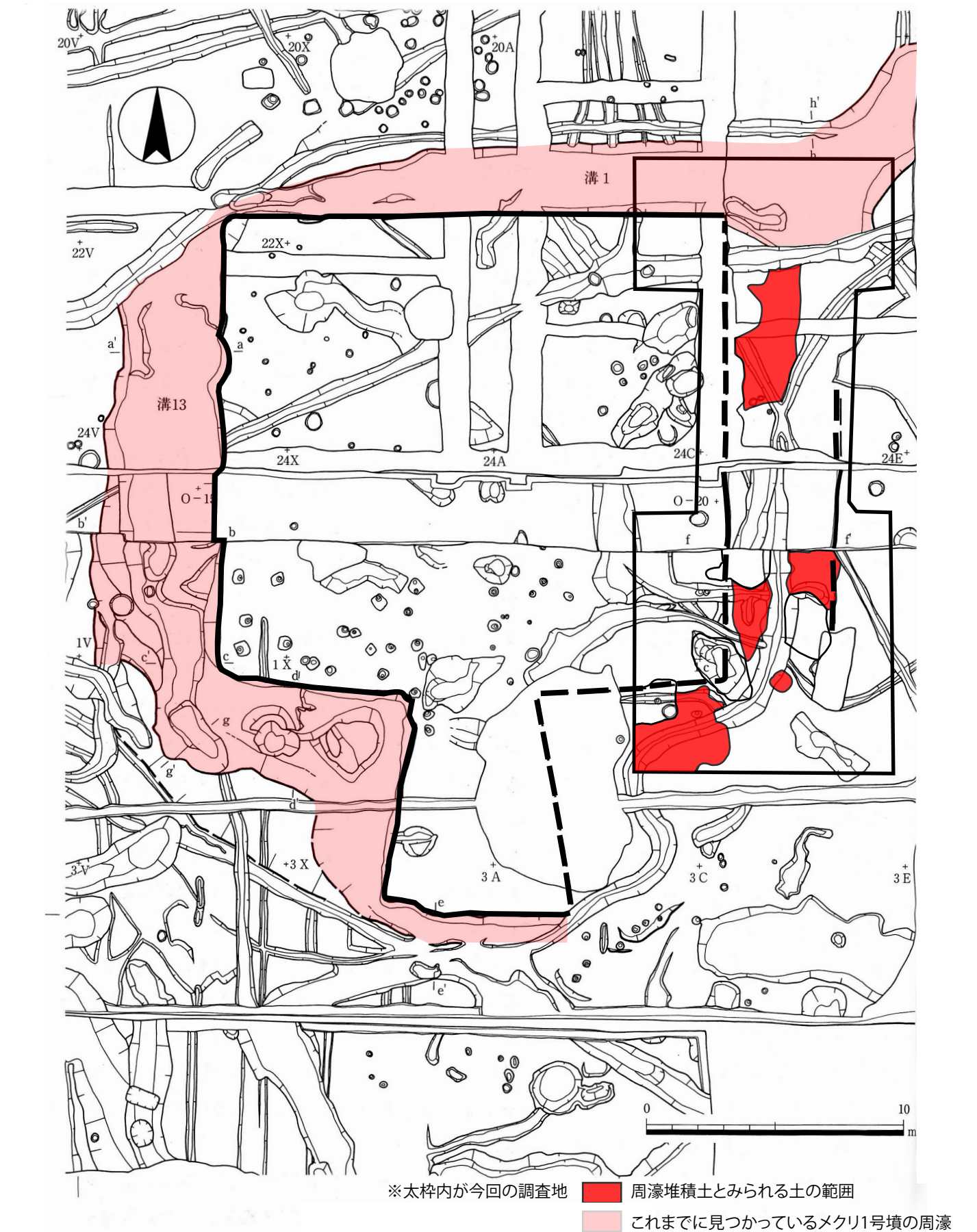


図3 2・3区(メクリ1号墳東側周濠)平面模式図(1/200)